



Title	H・ワロンの子どもの発達段階と「私という意識」の形成：言語活動に先立つものとしての表現行為（情動と模倣）をめぐって
Author(s)	上西, 知子
Citation	北海道大学大学院教育学研究科紀要, 96, 25-38
Issue Date	2005-06
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.96.25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28955
Type	departmental bulletin paper
File Information	96_P25-38.pdf



H・ワロンの子どもの発達段階と 「私という意識」の形成

— 言語活動に先立つものとしての表現行為（情動と模倣）をめぐって —

上 西 知 子*

Re-examination of Henri Wallon's Formation of "Self": The Emotion and Imitation as the Pre-language Expression

Tomoko UENISHI

【要旨】本論はアンリ・ワロン（Wallon, Henri）の子どもの発達段階における「私という意識（la conscience du <moi>, sentiment personnel）」の形成論を読み直し、言語活動に先立つものとしての情動表現行為と模倣表現行為に着目し、(i) 言語に先立つ表現行為は「私という意識」を準備し形成する、(ii) そのプロセスは私と周囲の未分化から私と周囲の二重化、そして分化へという構造を持つ、という仮説的解釈を提出し検討する。未分化から始まる「私という意識」の形成は、3歳位に表れる模倣表現行為が身振りと表象の二重化とそのズレ（不一致）による相互変化を繰り返しながら「私」を周囲から分化させ「私という意識」という認識を作る。この認識を準備するものが、まだ自他未分化の状態である生後3ヶ月位から表れる情動表現である。情動表現とそれに対する他者の対応とのズレが表現行為と他者対応を相互に変化させ、これを繰り返すことにより自分に属さないものを直観的に意識化するという「私の意識の根」を作る。これが「私という意識」の起源である。

【キーワード】私という意識、表現行為、未分化→二重化→分化、ズレ（不一致）、相互変化

序章

筆者の専門は日本画の制作で、子どもの造形活動にも関わっている。子どもは言葉以外でも、造形活動に限らず、実に多様な表現をする。特に問題を抱えて厳しい状況にあって、しかもそれを言語化できない子どもにとっては、言語以外の表現は重要である。言語以外の表現に促され言語表現が表れてくることは多い。言語活動に先立って表象世界との重なりを準備し何らかの認識を得ていく表現行為があるものと思われる。この言語以外の表現行為に注目したとき、子どもがまだ言葉を操れない段階で、周囲に向かって表現行為をしながら、それがやがて「私という意識」（以下「私意識」）をつくっていくことに注目した。子どもの発達過程のなかで言

* 北海道大学大学院教育学研究科教育臨床講座博士課程（教育臨床心理学・臨床教育学研究グループ）

語に先立つものとしての表現行為がどのように「私意識」をつくっていくのか、そしてやがて獲得する言語表現の表象世界とどのように関連するのか、これが本論の問題意識である。

本論の目的はアンリ・ワロン (Wallon, H. 1879~1962) の子どもの「私意識」の形成についての論文 (Wallon 1956a, 1952, 1946) と子どもの精神発達段階 (Wallon 1956c) についての論文を主に検討して¹、子どもは「私意識」をどのように作っていくのかについて、ワロンの考え方を捉え、「私意識」の形成過程と言語に先立つ表現行為との関係について明らかにすることである²。

「私意識」の形成について、「私」という意識が自己中心性から社会化されていくことによって形成されるとする個体主義的心理学や、環境条件に依存し周囲の知識・技術への同化がされていくとする社会主義的心理学に対して、ワロンは「私意識」あるいは自己同一の観念が作られる過程とは、周囲と混ざり合っている未分化な「私」の状態から、周囲との関係性の中で、周囲と私の二重化の状態を経て、周囲との境を見出し、周囲から「私」が分化し「私」が独立した固体となる過程であるとしている (1949 訳 p258~259, 1983 訳 p21)。ワロンが「自我は他者と一緒に形成される (Le Moi et l'Autre se constituent conjointement. 1956a p97, 訳 p51)」というのはワロンの形成論をよく表している。

このように「私意識」である自己同一の観念は初めからあるのではなく「未分化」から「二重化」を経て次第に「分化」してくるものである。この観念は、子どもが体験している状況の中で、3歳以降現われてくる。この自己同一の観念をワロンは「心的自我」と「身体的自我」との統合であり、心的・身体的に、外部に帰するものと自己に帰するものとに区別がなされる必要がある (1949 訳 p163) とする。この時の「心的自我」とは、(i) 空間的・時間的反応が組織化されていることと、(ii) 自分の人格と他人の人格との対立が多少潜在的にでもできていることが条件である。一方「身体的自我」とは内部感覚領域と自己感覚領域と外部感覚領域との間に一致があることであり (1949 訳 p163)、これは自分自身の身体について多少とも特殊かつ分化した表象を持つことでもある (1954 p252 訳 p183)。

次に分化しない全体から内容物を分化させ区別するには、配列する枠組みが必要であるとワロンは主張する。この枠組みによって物が主体から離れてあることが解り、主体に自分の自己同一を認識させる (1949 訳 p260)。この枠組みの最も扱い易いものが言葉による表象世界である。しかしこの表象世界は言葉によって始めて出来上がるものではなく、むしろ言葉のみによる表象世界の形成は考えにくい程、それ以前より表象世界が準備される。これが言語活動に先立つ表現行為による「私意識」の形成過程にまず見られるものである。

それゆえ「私意識」の定義とは、心的にも身体的にも、「私 (moi)」に完全な自律性があり、周囲や他人 (l'autre) は全く自分の外に存在し、自分はひとつの独立した存在だという意識であるということが出来る (1946 p283 訳 p64, 1949 訳 p209)。この場合「心的自我」は (i) 空間的・時間的反応の組織化と (ii) 自分の人格と他人の人格との対立を条件とし、「身体的自我」は内部感覚領域と自己感覚領域と外部感覚領域との間の一致を条件とする。

¹ この子どもの発達段階論は「1955年にジュネーヴで行われた「発達段階」に関するシンポジウム (ピアジェも出席) でザンによって代読されたもののレジュメである (浜田 1983)。

² 引用は原則として翻訳を使用した。翻訳中では、「私」意識を自我、自己とすることが多いが、本論では原文の <moi> は「私」、あるいは「私という意識」とした。ワロンの引用論文については出版年と引用ページのみ掲載した。引用ページは原則として原文と訳文を併記した。

ではどのように周囲と「私」が「未分化」な状態から「分化」した「私」となるのだろうか。はじめに田中孝彦とザゾに従ってワロンの子どもの発達についての考え方を確認し、次にワロンの子どもの「私意識」の形成に関する筆者の仮説的解釈を提出する。

第Ⅰ章 子どもの発達に関する理解と仮説的解釈の提出

Ⅰ-1 田中孝彦とルネ・ザゾによるワロンの子どもの発達に関する理解

田中孝彦(1980)は、ワロンの子どもの発達に関する理解の仕方について整理し、明らかにしている。そのうちここでは、「発達の4側面と機能的優越の法則」「子どもの発達の7つの段階と機能的統合の法則」について注目したい。

「発達の4側面と機能的優越の法則」について田中は次のように整理する。ワロンは子どもの精神発達について「感情性の側面」「運動行為の側面」「認識の側面」「人格の側面」の4側面から見ていった。これらは最も早い心的発現である感情性(3ヶ月～)から、かなり遅くなってから現れる認識(2歳～)まで様々な活動が次々に代わって優勢を占め、又重なりながら現れる。これを「機能的優越の法則」と呼ぶ(田中1980 p115)。

「子どもの発達の7つの段階と機能的統合の法則」については次のように整理している。ワロンはこの4側面の優勢な活動に焦点を当てながら、精神発達を胎児の時期から思春期・青年期まで7つの段階に分けて子どもの発達を見る。

- ①胎児 (la vie intra-utérine) の段階
- ②衝動的運動 (impulsivité motrice) の段階 (0～3ヶ月)
- ③情動 (stade émotionnel) の段階 (6ヶ月を頂点とする)
- ④感覚運動 (activité sensori-motrice) の段階 (1～3歳)
- ⑤人格表現 (personnalisme) の段階 (3～6歳)
- ⑥カテゴリー的 (pensée-catégorielle) 段階 (学童期)
- ⑦思春期・青年期 (la puberté et l'adolescence) の段階

である (1956c pp73-78 訳 pp233～244)。

これらの発達段階は前段階を否定しつつ、つながりながら進み、次の発達段階を準備する。これを「機能的統合の法則」と呼ぶ。そして発達段階と年齢の関係について、ワロンは生理的年齢と発達の年齢は必ずしも一致しないと主張する。重要なのは発達の年齢であり、それに従って前の段階とは異なる様相を示すということで、発達段階は説明される(田中1980 p114)。

この発達の4側面と機能的優越の法則と、7つの段階と機能的統合の法則をまとめて表にしたのが表1である。

なお本論では誕生後の発達を対象にしているので胎児の段階は議論の中に含まない。そして言語が主流になる以前、しかし自分は完全な自律性のある独立した存在だという意識を持ち始める(⑤)「人格表現の段階」までを検討対象とする。

一方ルネ・ザゾはワロンの子どもの発達についての理解の特徴を次のように挙げている(ザゾ1978 訳 p73)。(i)生物学的に不完全であるため、子どもは本質的に社会的である。他の動物と違って、人間の子どもの生物学的不完全性を持って生まれてくる。それゆえ子どもが成長するためにはその生物的生体機能の成熟が必要となる。そして成熟までのある程度の年数、周囲

の他者の助けを必要とする。次に(ii)子どもは精神的に周囲と未分化だから、状況把握ができ、自分と周囲の他者との境界をつくり、他者から独立した固体としての「私」を形成しなければならない。このようにして子どもはだんだんと周囲から分化していくとする。

I-2 筆者の仮説的解釈

以上の田中とザゾによるワロンの子どもの発達に関する理解の整理から次のことが言えるだろう。子どもは生物的に不完全であるから本質的に社会的であり、他者と共生するために、他者への伝播と連帯のための「表現手段」を必要とする。次に精神的に周囲と未分化だから周囲から独立した個体としての「私」を意識するための「認識手段」を必要とする。そうすると「私意識」の形成には表現手段と認識手段を必要とすることになる。次に以下ではこの表現手段と認識手段の関係と「私意識」の形成との関連を、情動表現と模倣表現に注目して考察する。これは発達段階(表1を参照)の4側面のうち、「感情性の側面」と「運動行為の側面」が表現的側面であり、この表現的側面が各段階で交替に優勢を占めながら(機能的優勢の法則)統合され(機能的統合の法則)、「認識の側面」の機能を持ち、結果として「人格の側面」の「私意識」が形成される過程を見ることになる。

このように見ることによって以下では、ワロン理論について次のように仮説的解釈を提出したい。(i) 言語に先立つものとしての表現行為は「私意識」という認識を準備し形成する。(ii) そのプロセスの構造は「私」と周囲との「未分化」から「私」と周囲との「二重化」、そして「私」と周囲との「分化」へ(1949 訳 pp260~261)「未分化→二重化→分化」という道をたどる。これは言語表現における表象世界と現実世界の二重化に先立って、模倣表現による「私」の身振

表1 7つの発達段階と発達の4側面(網掛けは優勢的機能)

発達段階(年齢)	人格の側面	感情性側面	運動行為の側面	認識の側面
①胎児の段階(胎内時期)	(1) 未分化 生理的共生 情動的共生		姿勢反射	
②衝動的運動の段階(0~3ヶ月)		緊張+姿勢(筋緊張)	衝動的運動(筋緊張)+反射+痙攣	条件反射
③情動の段階(~6ヶ月~)		情動(筋緊張+姿勢+態度) 相貌的擬態		相互理解システム(直観)
④-1 感覚運動の段階前期(1歳~)	(2) 二重化 (融即)		感覚+運動→循環反応 歩行の始まり	場面の知能(直観) 言葉の始まり(物の名前と場所)
④-2 感覚運動の段階後期(~3歳)			やりとり行為(受動+能動) 交替やりとり遊び+ひとり対話	(連続的空間の統合+物の取り出し)
⑤人格表現の段階(3~6歳) 反抗+ナルシズム+模倣	(3) 同化→分化へ 私意識の形成		模倣(造形的態度)	推論的知能(表象) 代名詞・所有代名詞の使用 家族の布置 私の意識化
⑥多面的人格とカテゴリー的思考の段階(6~11歳)				
⑦思春期・青年期の段階(12歳~) 第二性徴		感情の両価性		

りと表象の「二重化」によって「私意識」を獲得するプロセスである。そしてこの「私意識」の獲得の準備をするものが情動表現の「私意識の根」である。

第II章 子どもの発達段階における「私意識」の形成

「私意識」の形成をワロンは発達段階の4側面のうちの「人格の側面」として見ていった。従って「人格の側面」に即して以下の順に発達段階を検討する。(表1参照)

- (1) 周囲や他者との「未分化 (le confusionnisme)」
- (2) 「二重化 (le dédoublement)」
- (3) 「分化 (différenciations)」

II-1 「未分化 (confusionnisme)」

(1) 衝動的運動の段階 (0～3ヶ月) (② 数字は表1の発達段階を示す)

誕生したばかりの新生児は、周囲の状況と自分とを全く区別できない状態 (le confusionnisme) である。「私」と周囲は生理的にも混ざり合っていて、「私」と周囲の境界が存在しない。あるいはあったり、なかったり変化する。この時期新生児は足をバタバタさせるような反射と痙攣のような衝動的運動の発散によって欲求を表現し、大人の援助を否応なく引き出し、欲求を満足させる (1956c pp74-75, 訳 pp233-235)。この時期の新生児と大人との関係を「生理的共生 (symbiose organique)」という。

(2) 情動の段階 (～6ヶ月) (③)

このような「生理的共生」の状態から生後6ヶ月くらいになると、多種多様な情動表現が可能になる。子どもは不安を持つようなものを見た時や空腹などの内部欲求に対して、自動作用では対応できないような時、情動が起こる。自動作用とは例えば、食べ物が口の中に入れば自動的に飲み込んで消化されるというような、意識しなくても自動的に行われる作用である。

この情動とは情緒の3つ①情動②感情③情念の中の一つで、この中で最も器質的・姿勢的な性格に属する。感情 (引込み思案) や情念 (嫉妬・野心) は、表象や認識との重なり合い及び衝突の影響による情動の違う形での現れである。情動は筋トヌス (筋肉緊張) と関節収縮によって起こる反応で、この反応に関係する感覚は姿勢・平衡や心的活動の構えに関係する「自己受容感覚」である。筋トヌスの緊張・興奮がその時の運動にうまく平衡していると喜び (joie) になり、刺激興奮が過度になると怒り (colere) になる (1938 訳 p159)。このように情動は感情や情念よりも状況に対して即時で直接的な反応である。この筋トヌスとその場に適切な痙攣 (泣く) という運動反応を引き起こしたり姿勢をつくったりするため、情動と姿勢と運動は密接に結びついている (1938 訳 p159)。このことを裏付けるのが情動の神経中枢の位置である。情動は下位脳の間脳と皮質下の神経核の2つの神経中枢の間で働いているので、下位脳での空腹 (=不快) 感覚を持つ場面に対して泣くという皮質下の運動反応を惹き起こすことができる。姿勢は感情につながる情動と運動を可能にするので、情動 (心) も運動 (身体) も同じように姿勢という起源を持つというのがワロンの独自の情動理論である。

一方この情動には2つの作用がある。(i) 自分を含めた状況把握のための信号となること。つまり子どもはいつもと違う刺激を受けた時、その時起こる泣く等の情動によって初めて、ただ

ならぬ周囲の状況を把握する（1949 訳 p261）。情動は外部を知る一種の信号になる（1938 訳 p 171）。だから泣き方が状況を説明する時もある。これが「意識の根」である。（ii）もうひとつは情動を他者に伝播し、他者との連帯を作ることである。子どもは情動によって周囲の大人に働きかけて、欲求を満足するために必要な対応を大人から引き出すことができる。それゆえ泣く等の情動の持つこの伝播の性格によって子どもと大人との間に「相互理解システム」が作られる。この時期の子どもと大人との関係を「情動的共生（symbiose affective）」という。この情動表現と「相互理解システム」については第 III 章で詳しく述べたい。

（3）感覚運動の段階前期（1 歳～）（④－1）

子どもは 1 歳くらいから対象物に対して、対象自体がモチーフになり、興味を示し、感覚運動ができるようになる。感覚運動とは、色々な領域の機能をつなげることである。例えば目で捉えたものを、姿勢を作って手を伸ばして掴んだりできるようになる。これは知覚（外受容感受性）と姿勢（自己受容作用性）と運動（外受容作用性）の領域を繋ぎ合わせることができるようになることである。身体全体の運動は黄紋筋の働きで、それによって手足を移動させる身振り（間代性機能）と筋肉のバランスをとる平衡作用である姿勢的反応（緊張性機能）とが調和され結合される。

この姿勢的反応は先に述べたように自己受容系の働きである情動反応でもある。それゆえ運動と情動とは姿勢反応でつながっていて、運動は情動の対立概念ではなく、同じ起源を持っているということになる。

目で見たものを手で掴んで口に入れることができると、同じ効果を求めて繰り返しその行為を行う。これが「効果の法則（law de l'effet）」による「循環反応（activité circulaire）」である。こうして再現が目的のための手段となり意識化され、これがその時々多様な印象の中から有効なものだけを集めてくる同時的直視能力＝「場面の知能」となる。「場面の知能」は表象である過去の記憶や未来の予見を持たないが、同じ効果の再現は、意識化され信号化される。この信号は足跡を見て獲物を追いかけるというような「指標（index）」に近い。これは表現行為と認識の両面で行われているが、その場限りの目標でしかないため表象とは区別される。この「循環反応」は「身体的自我」の条件である内部感覚領域と自己感覚領域と外部感覚領域との一致を準備していくことになる。

子どもは 1 歳くらいから自分自身で能動的に移動運動（歩行 marche）が出来るようになり、継続的にたどる色々な環境を一つの連続空間の中に統合できるようになる。自分で距離を縮めることができ始めて、物の相対的な位置関係がわかってくる。又移動空間に発見したものを同じ物だとわかったり、見失ったものを意図的に見つけたり、予見することができるようになる（1956c p76 訳 p238）。

同時にこの頃、言語（parole）である物の「名前」によって、周りの知覚全体からその物を取り出すことができる。又目の前から刺激印象が消えた後にも「名前」によって存在し続けるし、茶碗は大きさが違っていても茶碗というような他の類似の物と結びつけることができるようになる（1956c p76 訳 p238）。

この歩行と言葉が、序章で定義を検討した際に触れた 2 つの条件のうちの「心的自我」の条件である「空間的反応と時間的反応の組織化」をもたらす表象的認識を準備するようになる。しかし歩き初めてすぐあるいは言葉を使い始めてすぐ、表象的認識が可能だという訳ではなく

て、「場面の知能」の現実の場面に依存する直観的把握と重なっている時期は長い。「ママ」といって指差す子どもは、初めその指差す鼻の先がママだと思っていることが普通であって、カテゴリー的言語表象は準備されていくが、まだ時間が必要である。

II-2 「二重化 (le dédoublement)」

周囲と未分化な状態から分化していく時期に、子どもたちは同じひとつの場面の2つの極を行き来する遊びをするようになる。それが交替やりとり遊び (jeux d'alternance) である。

(1) 感覚運動の段階後期 (～3歳) (④-2)

この時期に持つ「場面の知能」では意識がその時その時の印象に支配されているので、連想の働きによって統一された表象をもたない。しかしこの段階でも運動身振りが、その場限りではあっても、意識に、ある表象を与える手段となっていく。

1歳くらいから子どもは漠然とではあっても他者を他者として捉えられるようになり、すべての行為には、自分という唯一の極だけがあるのではなく、行為を行う方の極と行為を受ける方の極という2つの極があることに気づくようになる(1952 p313 訳 p83)。これは食事を与える側+与えられる側、イナイイナイバー、逃げたり+追いかけたりなどの交替やりとり遊びのような場面で、する側+される側という受動と能動の2つの極を行き来しながら体験することに始まる。この遊びのイメージの世界でのやりとりが一人対話である。このやりとりの中で相手の人格を発見し、自分自身を発見する(1956a p88 訳 p27, 1946 p282 訳 p61, 1952 p313 訳 p82)。とは言ってもこの時期には現実の場面に強く依存していて、環境の中で相手の個性というものがまだ分化していないし、自分の立場を定めることもできない(1952 p313 訳 p83)。しかし自分の感受性の中に他者を認識し始め、この「二重性」を認めるようになる。

II-3 「分化 (différenciations)」

やがて交替やりとり遊びは消えて、「人格表現の段階 (⑤)」になると「模倣 (l'imitation)」が始まる。情動表現行為で芽生えた漠然とした「意識の根」から「私意識」へと移っていくのが、「人格表現の段階」での模倣行為である。模倣は現実世界に表象世界を重ねていく「同化から分化」の表現行為である。今までの現実の状況と結びついた「場面の知能」から時間を経て今ないものを思い浮かべて表象世界をつくることのできる知能である「推論的知能」が現れてくる。自分自身の特徴を他の人に投影したり、自分自身の欠点を自分の中にはなく、その外に見出そうとする転嫁(transitivisme)があらわれる。あるいは自分の外にある人や物を演じて、全く別の人物になろうとする置換 (échange) や変身 (mutation) などがある(1956a p96 訳 p47)。これは他者の中に見た効果を自己に取り入れることである。

(1) 人格表現の段階 (3～6歳) (⑤)

「人格表現の段階」では、自律の欲望としての反抗(opposition)と、自分を肯定しそれによって自律を確認する為に他者の同意を求める寵愛期・ナルシズム (période de grâce, narcissisme) と、その裏返しである嫉妬(jalousie)が現れる。そして嫉妬の対象となる人や好きな人の役割などを真似して、自分のものにしたいという欲望が現れ、これが「同化」への動機になる。対象に「同化」したいという願望や欲求を満たす手段が「模倣」であり(1962 訳 p181)、この

「同化」から「分化」を最もよく示すものが「模倣」である (1956a p97 訳 p51)。

「模倣」とは、手本を再生する行為であるが、自分の身振りという代用物を使って手本の表象を意図的に再現する行為と定義される。一見模倣と同じように見えても、反射や本能などの類似行為、あくびや相互の微笑みなどの擬態、反復症や固執などの再生行為は模倣とは言えない。ここで模倣に似たものから模倣を区別するものが、「表象作用 (représentation)」である (1962 pp184-185) (詳しくは拙稿 2002 参照)。模倣については後に詳しく述べたい。この自己主張の初めの段階は「3 歳児危機」と呼ばれ、子どもの発達の激しい時期である。確かにこの時期になると、自分のことを 3 人称で呼んでいたのが「私 (je, moi)」「私のもの (mien)」という一人称の代名詞、所有代名詞を使えるようになり始める。これは「私意識」の現れでもある。しかしこの段階でも身振り動作はやはり子どもにとって重要な自己表現である。

以上発達段階にそって「私意識」が周囲と「未分化」な状態からはじまり、そして周囲との「二重化」、周囲の同化・取り入れから「分化へ」とその形成の過程を追ってきた。「人格表現の段階」の「3 歳児危機」を越えたあたりで、どこまで確信をもてるかはともかく「私」は自分に完全な自律性があるのだと考えるようになる。他人はまったく自分の外に存在し、自分はひとつの独立した存在だと考えるようになる (1946 p283 訳 p64)。このあと発達段階は学童期の「多面的パーソナリティとカテゴリー的思考の段階」と「思春期・青年期」と続くことになる³。

そこで次に以上のような発達段階において現れる様々な行為の中でも、情動表現と模倣表現について、もう少し詳しく見てみたい。そして「私意識」をつくる過程での表現行為について考えたい。

第Ⅲ章 表現行為

「感情性の側面」の情動表現と「運動行為の側面」の模倣表現に着目して、「認識の側面」の変化を見ていくことによって、「人格の側面」の「私意識」の形成過程を見ていきたい (表 1 参照)。

Ⅲ-1 情動表現 (③)

今まで見てきたように、子どもは自動作用で適応できない時、痙攣などの緊張性活動の情動が起こった。この情動表現には 2 つの作用があった。(i) 自分の直観的意識化を含めた状況把握のための信号としての情動と、(ii) 子どもの状態を他者に伝播し、他者との連帯をつくるため

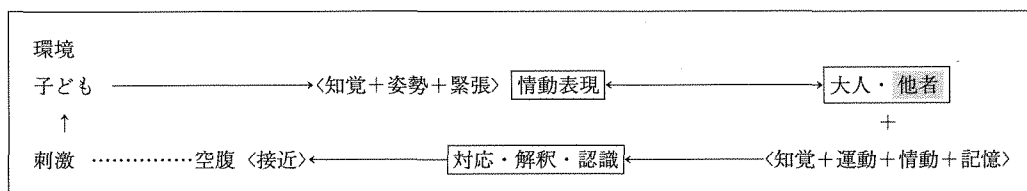
³ 多面的パーソナリティとカテゴリー的思考の段階 (学童期, 6 ~ 11 歳にかけて) では、作文で 1 番の者が徒競走ではビリであるように、相互の関係は、時、課題、環境によって変わり、自分自身を様々な可能性が同時に存在している場所として認識するようになる。人格に関する枠組みの多様性を認識し始め、カテゴリー的思考 (pensée catégorielle) がはじまる。妹が生まれたら、自分は姉の B ちゃんになるとは考えないようになる (1956c p77 訳 p 241)。知覚や認識の領域においても、対象や場面の異なる特性が、次第にうまく同定され、組織的に一貫した形での比較や区別や同化が可能になる。物の性質に従って分類の仕方を変えたり、物の特性を定義できるようになる (1956c p77 訳 p242)。

思春期および青年期の段階は、子どもと大人とを区分する波乱に富んだ重要な時期であり、第二次性徴の時期でもある。それに含まれる諸相は多様で互いに対照的で、相補的である。自我の要求が主体を独占してしまっているように見えるのだが、同時に外的な表現にエネルギーが発作的な情熱で消費されることもある。感情が両面性を示す時期である。臆病と高慢、媚と嘲り、絶対的な利己主義と自己犠牲が相伴うこともある (1956c p 77 訳 p243)。この年齢段階は宗教的・信仰的な選択、政治的な選択の時期でもあり、ここで知的な意味での家族、精神的な意味での家族を求める (1952 p321 訳 p100)。

の情動である。先述したように情動は身体的運動による姿勢的活動と、同時に心的感受性による外の状況や自分自身への「意識の根」を持つことができる。これらの身体的な反応と心的な反応の相互性が繰り返されると、それぞれの状況に反応する「塑型的(modelage)」姿勢行為(=身構え)のなかに、その場のイメージや意識の印象が持ち込まれる。このようにして情動の姿勢機能から意識の諸印象を「感情的」に引き出すことができるようになる(1938 訳 pp 171~172)。情動は姿勢と意識印象の相互性を持つので、直観的意識化による状況把握をすることができるのである(i)。一方この身体的、心的相互性が、同じ状況に対して共同的反応を惹き起こし、連帯関係を作ることもできる(ii)。そして状況の多様化は塑型的姿勢と意識的印象を分化・洗練させ、現実に対応していくことになる。

この作用をよく表わしているものが、この段階で子どもと大人がつくる情動による「相互理解システム(un système de compréhension mutuelle 1956c p75 訳 p235)」である。子どもが泣くと、なぜ泣くのかとあれこれ考え、実際に子どもに対処するのは大人である。そして泣くという表現行為が伝わり、それに答える大人の対応が子どもに伝わり、繰り返され、相互に変化しながら洗練されて作られるのが、「相互理解システム」である。泣くということが栄養欲求のしるし(記号 signe)になっていく。このシステムを作るためには、目で見た姿勢や表情から情動を感じ、その情動が伝播されなければならない。直観の水準で行われる知覚と情動の結びつきが重要でもある。大脳皮質の弁別能力の発達は情動表現を信号系へ変え、他者に伝える。泣くということが空腹ということのしるしとなり、泣くことが食べ物を得る目的のための手段となることである(1946 p281 訳 pp58-59)。どんなしるしがあるときうまくいくのだろうと考えているように見えるが、そうではなくて、その基盤は先述した「自己塑型的」姿勢(activite proprioceptive)と「感情表出的」な意識の印象との相互性によって惹き起こされた直観的な状況把握と連帯感によっている。このように情動の「相互理解システム」の中で情動表現は、他者に対して「私」の状態を直観的に把握して伝播する手段となる(表2 参照)。

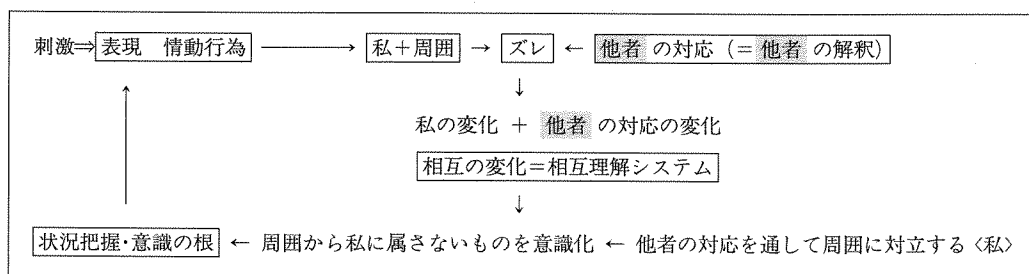
表2 相互理解システム



このように相互理解システムの中で、子どもは(i)他者との連帯感を作ると同時に(ii)自己を含めた状況の把握をしていくこととなる。子どもは情動によって自分の置かれている状況を漠然と掴んでいくが、周囲と「未分化」なので、自分に属することと、周囲から来ることを区別することができない。これが子どもの「私意識」をつくる時の難しさである。しかしその時、未分化であっても他者との「相互理解システム」を作る為に子どもが自分の表現行為を変化させることができるのは、子どもの表現と大人の対応の間に生まれる失敗の「ズレ(不一致)」があるからである。子どもは欲求や不快の印象とその後の大人の対応の印象とを繰り返し体験し、その中で「ズレ」を体験すると、子どもは自分の欲求をめぐるやり取りを再現し変化させるようになる。又大人も情動表現の解釈を見直して対応を変化させていく。この「相互変化」が情

動の多様化、洗練化に繋がり、予期される場面を先取りし、環境に適応できるようになる(1953 p62 訳 p131)。このような失敗による「ズレ」と、子どもが変われば大人も変わる、周囲が変われば子どもも変わるというような相互変化によって、子どもは全く直観的にはあるが、周囲に対して自分に属するものを意識していくことができる。同時に相互理解や相互変化は、自分に属するものと属さないもの分けていく一方、この異質なものを取り入れて表現の多様化、洗練化もしていく。この意味で情動は「意識の根」ということができる(表3参照)。これは後の「私意識」の形成を準備することになる。

表3 情動表現行為



III-2 模倣表現

情動表現で芽生えた「意識の根」から「私意識」へと移っていくのが、現実世界に表象世界を重ねていく「二重化→分化」の模倣表現である。

子どもがあこがれる人の身振りを手本として、時間を置いて模倣する時、以前に見た身振りを思い浮かべ、姿勢を作り、動作を再現しなければならない。知覚と姿勢と運動をつなげるという姿勢による感覚運動行為が基礎となって模倣は可能になる。これは「感覚運動段階(④)」で準備され始めた「身体的自我」の条件(内部感覚+自己感覚+外部感覚領域の一致)を満たすことである。

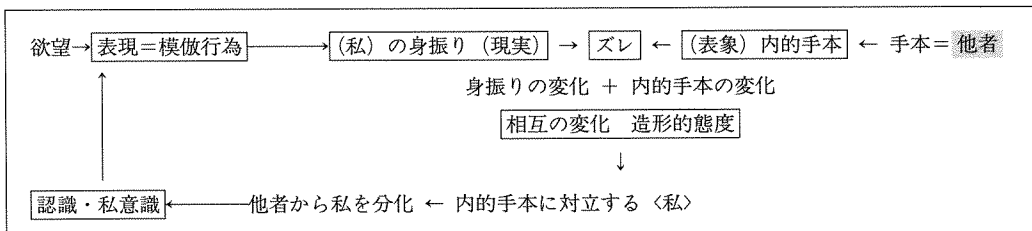
模倣をする時思い浮かべられた手本は「内的手本」という他者の表象である。子どもはこの他者の表象である「内的手本」を自分の身振りをを使って再現する。この時内的手本の全体像を見ながら、手足の位置などの部分的な身振りを再現しなければならない。又同時に「内的手本」も身振りもどんなに複雑なものでも、直観である程度大雑把なひとまとまりのものとして具体的に捉えられないと実際に身振りにとはならない(1962 訳 p185)。それゆえ模倣は直観と予見と分配の能力を必要とする。

筆者は制作や造形教育をする中で、この「内的手本」というものがとても曖昧なものであることに気がついた。はじめに「内的手本」があるというより、常に変化し変化されていくことによって、その場その場で「内的手本」が浮かび上がるというようなものである。身振りを内的手本に一致させようとすればするほど、かえって不一致という「ズレ」が生まれる。その「ズレ」は自分の身振りを変化させ、同時に内的手本を変化させる。だから内的手本と身振りは刻々と変化する。情動の「相互変化」と同様、「私」の身振りと「内的手本」との相互変化も重要である。この状況に適応して常に変化し続けることが子どもにとって模倣の難しい理由である。ワロンはこれを「造形的態度」と呼んだ。

このように模倣行為の過程で、「私の身振り」という現実世界と「他者の内的手本」という表

象世界の「二重化」とその「ズレ」が、「身振り」と「内的手本」とを対立させる。ズレとは「私」と「他者あるいは周囲＝私に属さないもの」の表れである。この拮抗関係の中で、相互に変化しながら、ズレを生じさせる「自分に属さない異質なものを意識し私を意識化していく一方、同時にこの「異質なものを取り込んで自らを多様化し自己適応をしていくことが子どもはできるようになる。この対立と変化の中で、子どもは手本と違う「私」を意識し、手本を取り入れ多様化する「私」をも意識するようになる。模倣という表現行為が自他分化した「私意識」の認識を助けるのである（表4参照）。これは歩行と言葉の獲得時期に準備され始めた「心的自我」の条件である「空間的・時間的反応の組織化」と「自分の人格と他人の人格との対立」を満たすことでもある。

表4 模倣表現行為



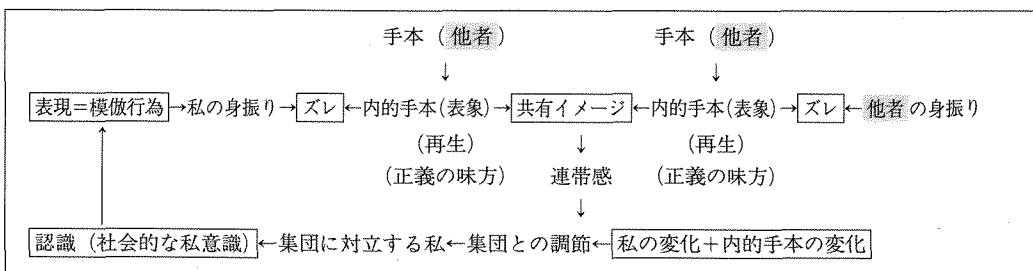
一方子どもがウルトラマンの真似をする時、この模倣行為も現実世界と表象世界を一致させようとするものだが、シンボルの要素を含んでいる。ウルトラマンの身振りを真似るのは、ウルトラマンの再現イメージだけでなく、それが持つ力強いイメージという2つの表象を統一する。強いウルトラマンを真似る身振りはウルトラマンに同化すると同時に、その力を身に帯びるという別の意味の置き換えに向かう。この時ウルトラマンの身振りは「シンボル」になる。

又子ども達が集団で仮面ライダーの真似をする時、その身振りの再生だけが目的なのではなくて（1962 訳 p154）、集団の連続性や連帯という別の「イメージの共有」をも目的とするようになる。模倣は具体的な対象に結びつきながらも、シンボルの面へ移動することができ、象徴作用である置き換え能力を持つ（1962 訳 p220）。これは模倣によって個人的行為から個と集団との相互関係の調節をするようになる。同時に集団が持つ仮面ライダーのイメージと自分が持つ仮面ライダーのイメージとのズレが生まれる。このズレによって、自分のイメージを集団のイメージに対立させて、相互のイメージを変化させながら、集団に対立する「私」を意識すると同時に、集団の異質なイメージを取り入れて多様化されていく「私」も意識するようになる（表5参照）。儀式や集団遊びでの模倣は個人的な認識から集団的・社会的な認識へ移行することでもある（拙稿 2002 参照）。

真似るという同じ姿勢や行為を集団ですると、なぜ相互の連帯感やイメージを共有することができるのだろうか。又二重化の「ズレ」の中でなぜ相互に変化していくことができるのだろうか。それはワロン独自の情動論が説明すると考える。つまり「情動的段階 (③)」や「感覚運動的段階 (④)」で明らかにしたように、情動（心）も運動（身体）も同じように姿勢という起源を持つというワロンの情動論によれば、模倣行為の運動は姿勢と密接に結びついていて、その姿勢反応は自己受容系の働きである情動作用を持っている（1938 訳 p168）。情動には繰り返された同じ状況に対する「塑型的」姿勢反応（＝身構え）が心的な同じ意識印象を引き起こす

という相互性があった。この相互性は同じ状況での子ども集団に対して、共同的反応表現を惹き起こさせ、イメージを共有し、連帯感をつくることができる。大人にも見られるスポーツ観戦での集団的熱狂がこれである。この相互性は、情動表現では欲求と対応とのズレを埋めるために相互変化をしながら作る相互理解システムに見られるものであり、模倣表現では運動に含まれる姿勢活動を通して感情を伝播し連帯感を作りながら繰り返される相互変化に見られるものであると説明できる。確かに模倣表現行為で生まれる表象はこの情動と相殺し対立する関係を持つ（1949 訳 p81）が、情動がなくなるわけではない。このように模倣表現によって「私意識」が形成されるずっと前に情動表現によって「私意識の根」が準備されていたと同様に、模倣表現による連帯感や共有イメージを持つずっと以前に情動表現での他者との連帯感や「相互理解」と「相互変化」が準備されている。

表 5 社会的模倣



このように見てくると、「未分化→二重化→分化」という「私意識」の形成過程のうち「二重化」においては、実は「二重化」の過程で二重になっている表現行為と表象（他者）のそれぞれの間に「ズレ」が生じ、その「ズレ」によって互いに变化する「相互変化」がもたらされる。従って、「私意識」の形成過程は、より厳密には「未分化→二重化→ズレ→相互変化→分化」と理解すべきである。分化は、この「二重化→ズレ→相互変化」の部分が繰り返されることによってはじめてもたらされるのである。

このズレとは「私」と「私に属さないもの＝異質なもの」の表れである。このズレによって異質なものの境界をつくり「私」という領域を認識していくことが出来る。しかし同時に相互変化をすることによって、異質性を取り込んで「私」を多様化し周囲との連帯を持つこともできるのである。

この時繰り返し相互変化が可能なのは、言語以前の表現行為の基盤が姿勢反応にあり、情動的作用があるからである。姿勢によって情動が他者に伝播されたり、相互変化が可能なのは、情動表現の相互理解と相互変化にその起源がある。

又この模倣表現の段階で「心的自我」の (i) 空間的・時間的反應の組織化と (ii) 自分と他人の人格の対立という条件と、「身体的自我」の内部感覚+自己感覚+外部感覚領域の一致という条件は共に満たされることになる。これらが今までに見てきたことである。

終章

「私意識」に関する筆者の仮説的解釈は、(i) 言語に先立つ表現行為は「私意識」という認識

を準備し形成する、(ii) そのプロセスは自他（私と周囲）の未分化から二重化、そして分化へという道をたどる、というものである。

今回の検討で、子どもの発達には表現手段と認識手段が必要であるが、各表中での表現から認識への循環に見られるように、表現手段と認識手段は同じもので、表現手段が認識手段へ変化したということがわかった。そして表現から認識への変化のプロセスは「私意識」の形成プロセスであり、自他の未分化から二重化を経て自他分化へという構造である。その特徴的な表現行為が、情動表現と模倣表現である。

そして又、言語に先立つ表現行為の「未分化→二重化→分化」という「私意識」形成の構造の中の「二重化→分化」の過程では、「私と周囲」、「身振りと表象」の間に「ズレ」が起こり、相互が変化し、それが繰り返されるという「二重化→ズレ→相互変化→分化」の循環という内側の構造も明らかになった。

このズレによって「私」を「異質なものの」から分化させていく一方、子どもはこの異質性を取り込んで多様性に開かれた「私意識」を形成していく。これを可能にするのが今まで見てきた相互理解と相互変化である。

そしてこの相互変化が可能なのは、言語に先立つ表現行為の基盤となる「自己塑型的」姿勢反応によって起こる情動が情動を伝播し、相互に変化しながら、連帯感やイメージを共有する相互理解を作るからである。この相互変化と相互理解は、生後3ヶ月位から持ち続けている情動表現にその起源がある。

以上、周囲へ向かったの表現行為によって周囲と未分化から二重化、そしてズレと相互変化を繰り返しながら分化へという過程を経て「私意識」という認識を獲得するのを見てきた。今回の仮説的解釈による「読み直し」という検討は、表現行為を軸とする「子どもの現実」の考察の準備のひとつとしたい。表現行為の「私と周囲」の認識獲得プロセスについての実践と考察を今後の課題と考えている。

【引用文献】

- 田中孝彦 1980 アンリ・ワロン研究序説1 東京経大会誌 124号。
 上西知子 2001 コラージュ論序説 北海道大学大学院教育学研究科 教育臨床心理学研究紀要 第4号。
 上西知子 2002 H.ワロン著(滝沢武久訳)『認識過程の心理学——行動から思考への発展』を読み直す「模倣と思考」同第5号。
 Wallon, H. 1938 Rapports affectifs: les emotions, La vie mentale, Vol, VIII de <L'encyclopédie Française>. (浜田寿美男訳(1983) 情意的関係——情動について、『身体・自我・社会』ミネルバ書房。
 Wallon, H. 1942 De l'acte á la pensée. (滝沢武久(訳) 1962 認識過程の心理学 大月書店)
 Wallon, H. 1946 Le rôle de <L'autre> dans la conscience du <moi>. *Enfance*, 特集I, 再録版。(浜田寿美男(訳) 1983 『自我』意識のなかで『他者』はどういう役割をはたしているか『身体・自我・社会』ミネルバ書房)(今回のワロンのテキストは *ENFANCE* I 1959, II 1963, に再録されたものを使用した。)
 Wallon, H. 1949 Les origines du caractère chez l'enfant. (滝沢武久(訳) 1962 『認識過程の心理学』大月書店)
 Wallon, H. 1952 Les étapes de la sociabilité chez l'enfant. *Enfance*, 特集I, 再録版。(浜田寿美男(訳) 1983 子どもにおける社会性の発達段階『身体・自我・社会』ミネルバ書房)
 Wallon, H. 1953 L'organique et le social chez l'homme. *Enfance*, 特集II, 再録版。(浜田寿美男 1983 人間における器質的なものと社会的なもの。『身体・自我・社会』ミネルバ書房)

- Wallon, H. 1954 Kinesthésie et image visuelle de corps propre chez l'enfant. *Enfance*, 特集 I, 再録版.
(浜田寿美男 (訳) 1983 子どもにおける自己身体の運動感覚と視覚像. 『身体・自我・社会』ミネルバ書房)
- Wallon, H. 1956a Niveaux et fluctuations du moi. *Enfance*. 特集 II, 再録版. (浜田寿美男 (訳) 1983 自我の水準とその変動. 『身体・自我・社会』ミネルバ書房)
- Wallon, H. 1956b Importance de mouvement dans le développement psychologique de l'enfant. *Enfance*. 特集 I 再録版. (浜田寿美男 (訳) 1983 子どもの精神発達における運動の重要性. 『身体・自我・社会』ミネルバ書房)
- Wallon, H. 1956c Les étapes de la personnalité chez l'enfant. *Le problème des stades en psychologie de l'enfant*, Paris, P. U. F. *Enfance*. 特集 II. 再録版. (浜田寿美男 (訳) 1983 子どもにおけるパーソナリティの発達段階 『身体・自我・社会』ミネルバ書房)
- ワロン, H (滝沢武久訳) 1960 科学としての心理学 誠信書房.
- ワロン, H (竹内良知訳) 1982 子どもの精神的発達 人文書院.
- ザゾ, ルネ (波多野完治・真田孝昭訳) (1978) 心理学とマルクス主義 大月書店.

Abstract

The present writer will propose two hypotheses and discuss about them, focusing on emotional and imitative expressions by the child, while re-examining Henri Wallon's theory of formation of "self". The first is that expressive activities prepare and form the sense of oneself against others. The second is that a process of the formation is from the undifferentiated to the overlapping and to the differentiated.

From around six months old, the baby finds a way from the undifferentiated to the overlapping condition by being aware of the disagreement between its own desire and others' response to it upon the emotional expression and seeing mutual adjustments of either party.

At around three years old, it differentiates itself from the others, getting conscious of the disagreement between an image of others (a role model) in its mind and its physical imitation of the model and seeing the changes of each. Consciousness of the disagreement above mentioned leads to the development in consciousness of self.

keywords: consciousness of self, expressions, mutual adjustments, disagreement, the undifferentiated → the overlapping → the differentiated